

「磐城壽」鈴木大介氏と共に辿る、福島県双葉郡浪江町と酒蔵をめぐる現状。2013年7月9日

彼は、2011年3月13日の避難経路を忠実に逆に辿っていると、「いつもの」調子で淡々と語っていた。伊達郡川俣町でお昼を頂いた後、山形ナンバーの車は、国道114号線を一路東へ向かう。県外ナンバーの除染作業車、作業員を載せたマイクロバス。盛夏にすくすくと育つ稲の光景は、いつの間にか、雑草のみの生い茂る光景へと変化。

検問。身分証明の提出。許可。避難時には無かったという新しいトンネルをぬけ、車は双葉郡浪江町(津島地区)へ。天気は晴れ。美しい木々は「いつもの」夏の山道のように見える。



【2011年3月11日の時点での避難先。山の中腹、浪江町津島地区(標高約400m)】

残り、30kmの地点。「中学生のとき、川のヌシを釣りに自転車であつたんです。」海の男のイメージを抱いていたので、溪流釣りが好きというのは新鮮だった。浪江町、双葉町、南相馬市小高区の農業用水の水源の請戸川。見た目の美しさとは裏腹に、手元の線量計は、残酷な数字を叩き出していた。

一刻も早く抜け出さなければならぬと、スピードを上げ、25kmすすんだ。浪江町中心部。地震による傷跡が未だ生々しい。



【浪江町中心部。壽とは別の酒蔵の直売所の現状】

ここ2年の間、山形や大阪でお会いした浪江町の酒販の方。その方の店舗。同じ職業の者として、言葉では決して表せられない2年4ヶ月の時間。



【浪江駅前の酒販さん。同県二本松市へ避難中】

国道6号線をクロスした。海まで2km。彼は、淡々と語り続けた。消防団員としての3.11当日の現実を。元々、酒米：夢の香を契約栽培していた田んぼ跡地。雑草が生い茂る中に、朽ちた消防ポンプ車。当日、濁流に呑み込まれて助けられなかった軽自動車。手向けられた花に、思わず手を合わせる。



【津波の押し寄せた田んぼ。消防団員として乗車していたポンプ車が】

そして、その場所へ辿り着いた。彼は、庭木が息を吹き返しているのに感動していた。母屋と酒蔵の間にあったという。彼は、「一時帰宅」した一年前の夏との違いを、淡々と語った。そして、目の前には堤防。津波の破壊力を見せつけられるコンクリートの残骸。右手遠景には、福島第一原子力発電所の煙突がくっきりと。



【息を吹き返した、鈴木家の庭木】

「この堤防から眺める阿武隈高地の山並みを、時々忘れそうになるんですよね。」彼は、呟いた。毎日胸に刻みながら酒造りをしている、新天地・山形県長井市の雪を冠した山並み。



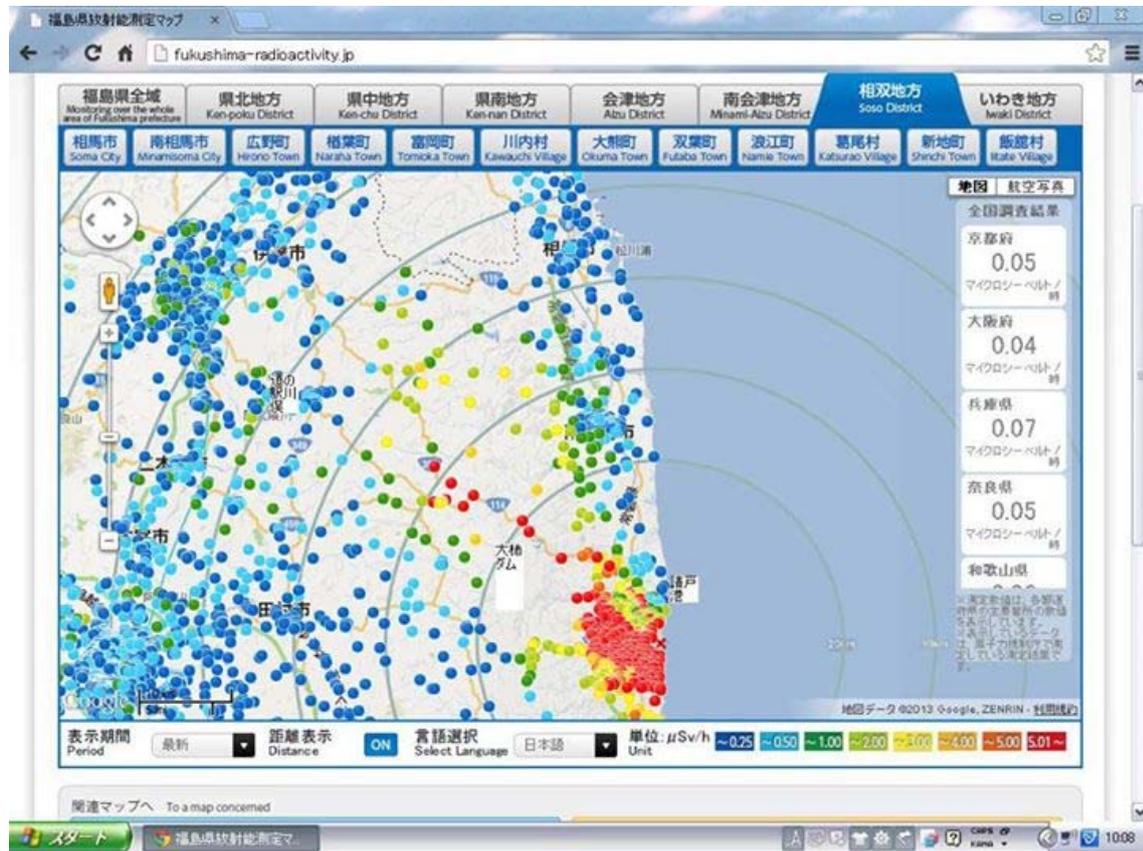
そして、彼は、こうも呟いた。「今もなお、同級生たち等、旧知の浪江町民がF1(福島第一)で危険な作業に従事している。だから、あれのこと(F1)を悪くも言えない。」



【酒蔵のタンクを塗るペンキの余りで、堤防の手摺が錆びないように塗ったそう。津波をかぶってから2年4ヶ月健在。大介氏は感慨深げに触っていました。遠景の煙突は福島第一原子力発電所】

3.11 以前、「磐城壽」を飲んでたのは誰なのか？そして、新天地で復活した酒を売るということは、どういことなのか？ここ最近、そればかり考えていた。この問いに対して、すぐに答えを出すことはできない。

浪江町請戸地区(F1から北北東 6.5km)の空間線量が奇跡的に低い(0.16~0.22 マイクロシーベルト/毎時)のが、何かの可能性を指し示している。彼の目は、それを信じている。我々は、それを後押しし続けなければならない。



【福島県浜通り～中通り地方の空間放射線量。鈴木酒造店のあった浪江町請戸地区は、福島県最東端で、色は青色(一番少ない)】